

最優秀賞 母の温かいご飯

生駒市立上中学校 2年 椎野 真心

「真心、ほんまに大丈夫なん。」

「大丈夫やって、心配せんといて。」

中学一年の時の夏休み。母の心配そうな言葉とは裏腹に、私の胸は期待に躍っていました。次の日から部活が休みに入る私は、母が仕事の間一人で留守番をすることになっていたので。つまり、昼食には冷凍食品などを食べることとなります。喜んでた理由はまさにそれ。「一人で市販のご飯を食べる」というシチュエーションに憧れていた当時の私は、夢が叶ってとても幸せな気持ちでした。

そして迎えた初日、わくわくしながら冷蔵庫を開けると・・・ありました。どうやら今日のメニューはチャーハンとスープのようです。電子レンジで加熱してからラップをとり、スプーンですくって一口。

「めっちゃおいしい。」

期待を裏切らないおいしさです。「やっぱりこういう商品は、みんながおいしいと思える様に工夫されているんだなあ。」などと思いながら、私はあっという間に完食してしまいました。

そんなある日、朝起きてみると、食卓にはご飯とみそ汁が並んでいました。朝はパン派の我が家では珍しいことです。不思議に思い母に聞いてみると、

「最近お昼は買ったものばかりやったやろ。せめて朝だけでも、できたてのご飯を食べて欲しかってん。」

という答えが帰ってきました。しかし、母は知らないかもしれませんが、私は昼食が市販であることを喜んでいるのです。少し複雑な気持ちで席に着きました。とはいえ、目の前に並んだご飯はとてもおいしそうです。食べないわけにはいきません。私はいつものようにお米を口に運んだ、はずでした。

その瞬間、うま味が口の中ではじけました。それと同時に、甘味と香りも鼻から抜けてゆきます。間違いなく、これまでの人生で一番美味しい白米でした。本当に感動したとき、人は声が出なくなるものなのかもしれません。一心不乱に食べ続ける私を見て、母はこう言いました。

「どうや、たまには家のご飯も良いもんやと思ったやろ」

勝ちほこったような笑み。してやられました。悔しいですがうなずくしかありません。私の心を読んだように、母はにやにや笑っていました。

母が出かけた後、じっくり考えてみました。今朝、何時に起きて料理をつくってくれたのでしょうか。私は感謝の気持ちと、今まで母の料理の温かさに気づけなかったことへの反省で胸がいっぱいになりました。そして、これからある行動をしようと強く心に決めたのです。

それは、「母のご飯を味わって食べる」ということです。本当に単純なことなのに、私は今までやろうとしませんでした。そのことをさりげなく気づかせてくれた母に、私は頭が上がリません。これからは、日々ありがたさを噛みしめて味わおうと、心にちかいました。

あれから一年。夏休みに入り市販の昼食の日々が始まりましたが、もう以前の私とは違います。母の温かさがつまった夕食を楽しみに過ごす毎日です。